



今月のことば 令和5年(2023)3月 <No.199>

よきひとの仰せ

親鸞聖人は生涯、師である法然聖人のことをしたい、「よきひとの仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり（法然聖人のおっしゃることを信じているだけで、ほかに何かあるわけではありません）」という言葉が残っています<『歎異抄』第二条>。私たちお念仏の徒にとって、“よきひとの仰せ”とは親鸞聖人の仰せであり、お釈迦様の仰せであり、阿弥陀様の仰せのことです。

法然聖人



『よきひとの仰せ ～歎異抄 第二条～』大峯顯 著 より

いったいあなたは死んだらどうなるとお思いますかと聞かれました、たいていの人、無になること、消えてしまうことだと、答えるにちががありません。死とは何か暗い所に落ちることだと考えていると思います。…もちろんこれは、自分が勝手にそういうふうに決めているのです。自分がそう決めているだけであって、阿弥陀様やお釈迦様はそんなことおっしゃっていないんですけれども、阿弥陀様のおっしゃることよりも自分の言うことの方が正しい筈だと思って、何となくそっちの方を信じて生きているのが実状のようです。

…如来様は十劫の昔から、私たちに**お前は死なないよ**とおっしゃるのです。

ここで「死なない」といっている意味は、今の命が永遠に続くということではなく、**人としての死を迎えたあと、浄土で覚りの仏となり永遠のいのちをいただく**ということです。「だから我（阿弥陀）にまかせ、お念仏申しながら歩みなさい」と阿弥陀様がおっしゃり、お釈迦様がそれを教えてくださり、親鸞聖人が私たちに勧めてくださっているのです。



若い頃、どんなに厳しい修行に励んでも、尊い徳を積んでも救われることなかった親鸞聖人。逆に言えば、修行や徳を積めない者は救われなれないと思い込んでいたということです。聖人にとってこのよきひと（阿弥陀様）の仰せ（それを知らせてくださったのが法然聖人でした）は、文字通り人生がひっくり返る衝撃でした。

信心というのは自分の生の根底が変わってしまうことだと言えます。この世を見る態度が変わることです。…

今まで娑婆とは死ぬことしかないつまらない所だと思っておった。あるいは、娑婆がすべてだと思っていた。ところがそうじゃなくて、この娑婆において初めて、私はお浄土の永遠の命の中に生まれるんだということを知らせてもらった。この娑婆の命がなかったらこの真実にあえなかったのだ。そしたら、今まではつまらない所だ、せいぜい生きたところであとしばらくじゃないか、何のためにわたしは生まれてきたんだろう、と**思っていたこの現世こそ、実はお浄土を知らせてもらう大事な場所であった**ということがわかります。これが世界が変わるということの意味です。

私たちも「経験からしてこうであるはず」と、自分だけを信じる“自分教”になってはいませんか？ 繰り返し“よきひとの仰せ”を聞きながら、この苦惱多き娑婆世界を大事に歩ませていただきます。



慧日山 真光寺